

総合的な学習の時間

実生活や地域の中から自ら課題を見出し、 その解決のための方策を探る

予測が難しく、変化の激しい現代社会において、探究的な見方や考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、さらには自己の生き方を考えていく。また、そのための資質・能力を育むことを目標とした総合的な学習の時間。

今回は地域活性化に向けた取組を通して、自分の将来と地域の在り方について考える実践を進めてきました。



県中教研 総合的な学習の時間部 全県部長
新潟市立岩室中学校

校長 小塚 忠昭

総合的な学習の時間で育みたい資質・能力について考える

総合的な学習の時間の目標は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指すものであると示されています。また、目標や内容については各学校で定めるとしており、各学校では、地域の特性や生徒の実態、学校の教育方針などに基づき、目標や内容の他、育みたい資質・能力の育成方針を定めていきます。

そして、育成したい資質・能力を具体化するため、総合的な学習の時間で様々な教育活動を組織していきます。そこではプロジェク

ト型学習（PBL）やフィールドワーク、地域連携活動といった学習などが考えられます。

また、生徒自身がこれらの学習を通してどのような力が付いたかを認識することで、自己肯定感や自己有用感の高まりにもつながります。時には地域の方々からの評価も有効です。

これらが効果的に作用することで、生徒はどのようにしたら社会や自分の人生をよりよいものにしていけるかを考え、自分の可能性の広がりにも気付くことができるものと考えます。

【探究のプロセス】～このプロセスを繰り返すことが大切～

【課題の設定】

課題を設定し、課題意識をもつ

【情報の収集】

必要な情報を取り出し
たり収集したりする。

【整理・分析】

収集した情報を、整
理・分析し思考する。

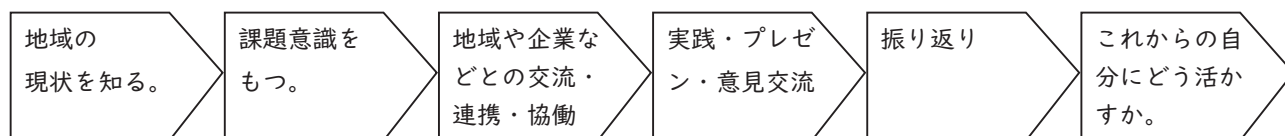
【まとめ・表現】

気付きや発見、自分
の考えをまとめ、判
断、表現する。

深い学びにいたる学習課題設定と、自分事にするための地域社会との連携における工夫

新潟柳都中学校の実践では、アントレプレナーシップ教育の考えを取り入れた実践が行われます。この教育の理念に含まれる様々な要素を取り入れながら、新潟市内の「しもまち」地区の活性化について考えます。生徒は地域の声や行政の取組など生の声を聞くことでより現実的な課題意識をもつことができ、それらを基に、自分たちが考えた活性化案をプレゼンします。それを聞いた地域の方々や行政、起業家との意見交流の中からさらに考えを深めていきます。

三和中学校の実践では地元（三和区）の企業団体と連携して、地域活性に向けたイベントを企画、実践し、将来の地域の在り方についても考えます。人口減少が進む地域の中で自分たちができることは何かを考え、他者との協働から解決策を練り上げる。さらには1回のイベントで終わらず、どうしたら継続できるか、広く発信できるかも考えます。この学習を通して、地域の未来だけでなく、これからの自己の生き方についても考えるきっかけとなるはずです。



学校全体で取り組みたい体制整備・地域連携に向けて

生徒の主体的な学びを促進していくためには、各中学校において、継続的に総合的な学習を進め、学校全体で一貫性をもった取組を行う必要があります。

校内で限られた担当者のみが計画、運営をしているのはこれらのことが難しくなります。また、生徒の活動が多岐に渡るため、アドバイスする職員にも高いスキルや知識が求められるケースも出てきます。これらの点から、学年部または学校全体で総合的な学習を計画・運営していく体制整備が求められます。

今年度の実践のように、地域との連携が求められる活動では、地域教育コーディネーターや学校運営協議会（CS）の協力も不可欠となってきます。地域社会との協力関係構築は、学習の持続性から見ても有効だと考えます。

また、生徒の活動が地域社会や地元企業へ還元されることで今後の連携も一層強化されていくと思います。

【総合的な学習を継続的に進めていくために大切にしたいこと】

- ① 学校全体で育みたい資質・能力について検討と共有
- ② 学校全体で年間計画の策定と共有
- ③ 学校全体での支援体制の構築（職員研修も含む）
- ④ 地域社会・外部機関との連携構築
- ⑤ 成果の発信と共有・地域への還元（地域や外部への発信も含む）
- ⑥ 継続的な振り返りと評価

総合的な学習の時間 重点方針

学習過程と評価を中核に、主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導を推進する。

- 学習過程において、「課題設定」を工夫し、「協働的な学習」と「言語活動」を適切に位置付けることを通して、探究的な学習の充実を図る。
- 「育てようとする資質や能力及び態度」の視点に配慮した評価の観点を定め、それに基づいて生徒の具体的な学習状況を想定した評価規準を設定し、学習評価の充実を図る。

総合的な学習の時間

<上越地区 / 上越市中教研>

11月28日(木) 研究会開催

研究主題：ふるさとへの愛と誇りを胸に、自分の将来と今後の地域の在り方について考える生徒の育成
単元名：「3年：三和区地域活性化プロジェクト」
～もうすぐで上沼道三和IC開通！わくわく三和区！～

会場校：上越市立三和中学校

公開：3学年

授業者：山川 純

指導者：上越教育大学 特任教授 釜田 聡 様
妙高市立妙高中学校 教頭 関原 和人 様



研究推進責任者
上越市立頸城中学校
中澤 優子



教科・領域担当者
上越市立三和中学校
山川 純

こんな深い学びの姿を目指します

三和区の10企業団体と連携し、三和区を活性化する活動を通して、「ふるさとへの愛と誇りを胸に、自分の将来と今後の地域の在り方について考える姿」を目指します。「探究し知る学び（探究サイクル）」と「発想し創る学び（デザイン思考サイクル）」の2つのサイクルを往還させ、地域のヒト・コト・モノをつなぐことで、「地域共生力」「創造的問題解決力」「協働性」の3つの資質・能力を高め、ふるさと三和を愛する子どもを育成します。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.1・4）

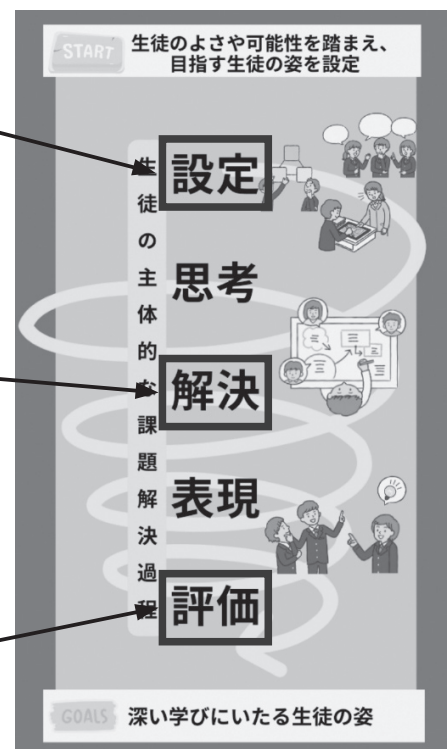
地域活性化に取り組んでいる企業へのインタビューを通して、その思いや実態から生徒が課題を設定し、課題解決に向けて計画を立てる。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.9・10）

課題解決に向けて、ICTを活用して情報を収集し、仲間と協働してアイデアを考案する。そして、企業と「創造」「検証」しながら新商品・新企画を練り上げる。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.18・19）

OPPシートを用いて、活性化プロジェクトで「どのような力が身に付いたか」「探究学習で学んだことは何か」という視点でこれまでの学習の成果を振り返る。

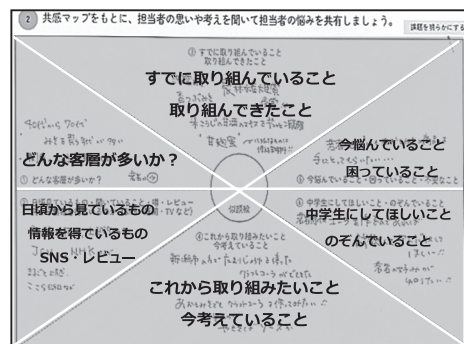
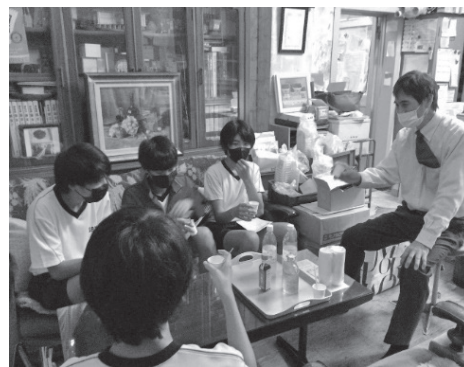


単元(題材)の様子

ポイント1

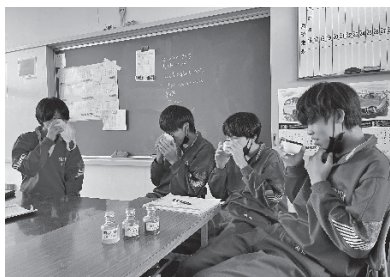
三和区総合事務所から三和区活性化プロジェクトの依頼を受け、デザイン思考をもとに課題を設定し、解決までの計画を仲間と協働して考える。【共感・理解】

単元ガイダンスでは、三和区総合事務所長と共に、三和区の魅力と課題について考えました。所長の話から、人口減少による三和区の衰退を防ぐためには、地域共生力(地域のヒト・コト・モノを活かして地域と共存する力)が求められていることがわかりました。そして、「区の活性化に向けて三和区の10企業団体と連携し、新商品や新企画を考えてほしい」という依頼を受けました。生徒は、各企業へ訪問した際に、共感マップ(右図)を用いてインタビューを行い、デザイン思考サイクルのもと、課題を設定しました。あおき味噌株式会社チームでは、「客層は年配の方が多く、若者に商品を手にとってもらえない。若者にも手にとってもらえるような商品を作るには、どうすればいいのか?当社の発酵食品で若者向けの商品を開発したい」というインタビュー内容から、「甘麹蜜を原料としたクラフトコーラはどうしたら若者向けの味になるのか?」という課題を設定しました。課題解決に向けて、全国のクラフトコーラの使用原材料を調べることで計画を立てていきました。



ポイント2

ICTを活用して情報を収集し、試飲・試食を通して新商品を創造する。祭りでの販売を通してさらに商品内容を練り上げる。【課題設定→創造→検証→振り返り】



ICTを活用し、クローブ、カルダモンなどの香辛料や甘味料について調べました。「若者に健康的な商品を」という社長のコンセプトのもと、香辛料や甘味料の組み合わせを変えて試飲を繰り返しました。あおき味噌の「甘麹蜜」とカルダモンを使用し、若者向けで健康的な甘さを出すことに成功しました。さんわ祭りで多くの人から飲んでもらい、アンケート結果から課題を再設定しました。

ポイント3



生徒作成
ロゴマーク

OPPシートによる学習成果の可視化とメタ認知

これまでの探究学習の履歴(小单元ごとの振り返り)を1枚のシートにまとめることで学習の成果を可視化し、どのような力が身に付いたのかをメタ認知できるようにしています。

研究会

「深い学びの姿」を実現

総合事務所長、地域協議会、地域コーディネーターと共にこれまでの学習の成果を振り返ります。そして、自分の将来と今後の三和区の在り方について考えたり、これから三和区にどのように貢献していくのかについて議論したりする予定です。

総合的な学習の時間

＜新潟地区／新潟市中教研＞

10月4日(金) 研究会開催

研究主題：問題解決や探究活動に、主体的、創造的、協働的で深い学びにいたる授業を通して、自己の生き方を高める生徒の育成

単元名：「3年：しもまちプロポジション」
～しもまちの活性化を地域住民とともに創出しよう～

会場校：新潟市立新潟柳都中学校

公開：3学年2学級

授業者：長部 賢・野田 真里奈・関 奈緒・大野 綾子

指導者：新潟大学経済学部 准教授 伊藤 龍史 様

新潟市教育委員会学校支援課

副参事 齋藤 まゆみ 様



研究推進責任者
新潟市立東新潟中学校
吉田 新



教科・領域担当者
新潟市立新潟柳都中学校
井上 美恵

こんな深い学びの姿を目指します

「しもまち」の活性化を願う地域や行政の想いや取組を受け、情報収集、調査、専門的立場の方に聞くなどして、地域の一員として主体的に活性化案を考え、聞く側に共感させるプレゼンができるよう工夫します。

そして、実際に、地域や行政に活性化案を説明し、さらにより提案になるよう、生の声を聞きながら自分たちの想いと地域の想いをフィットさせ、ともに創出していきます。アントレプレナーシップ教育の視点を取り入れた学習活動を通して、生徒が地域愛だけでなく、主体性、協働性、創造性や課題解決のための方法を身に付け、これからの社会で発揮していこうとする姿を目指します。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.1）

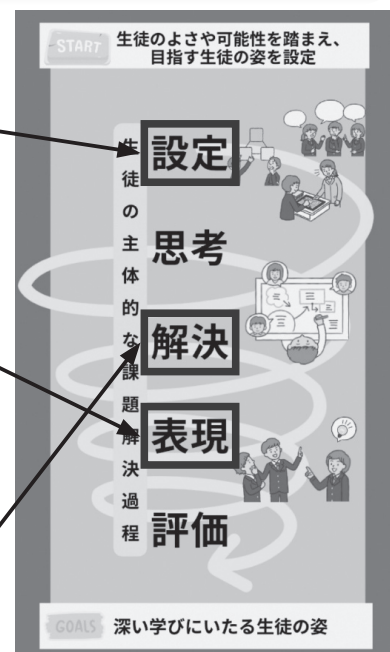
ギャップからの課題意識と、目標を共有する仲間探しで主体性をアップ↑

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.13）

“相手を共感させるプレゼン（ピッチ）”で、実現・協働への挑戦！

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.10）

生徒の活性化案を地域住民とともにお互いの想いをフィットさせて創出！



単元(題材)の様子

しもまち地域の課題を自分たちなりに考える。現状と課題を聞くことで、自分たちが思っている以上に深刻であることに気づき、改めて地域の課題を再考する。

しもまち地域の活性化に向けて、自分がしたいことを思い描き、共に行動を起こしていく仲間を見つけ、主体的に学習に取り組んでいく。

主体性

ポイント1



地域の方、行政の方、活性化に実際に取り組んでいる方、起業家の方をお招きして、自分たちが考えた活性化案を提案する。アントレプレナーシップ教育のキーの1つは、“相手を共感させるプレゼン(ピッチ)”。短い時間で、どれだけ相手を惹き付け、実現に向かえるか、協働者を作れるか。このチャンスをプレゼン(ピッチ)で挑戦し、つかむ。提示、順番、見せ方、声の出し方等も工夫し、論理的に魅力的なプレゼン(ピッチ)ができるようにする。

実現・協働への挑戦

ポイント2

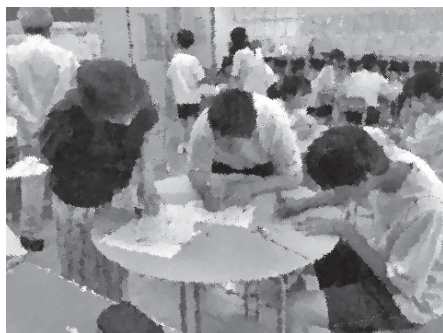
地域の方、行政の方、活性化に実際に取り組んでいる方、起業家の方にグループに入って頂き、活性化案のプレゼン(ピッチ)を聞いてもらい、ともによりよい案に練り上げていく。自分たちの想いだけでなく、相手の想い、願い、ニーズともフィット(合致)させて、実現できるようにしていくことが必要である。よりよいものを創っていこう(主体性)、周りの人とともに創っていこう(協働性)、地域のために実現させたい(貢献)などの気持ちや、意見を建設的に交わすことの重要性(創造性)という気づき生まれる。

主体性・協働性・創造性

ポイント3



研究会



本時では、次のことを手立てとしてポイント2・3を目指します。① ゲストとして、生徒とともに地域を考えていきたいと考えている地域住民を選定、② 活性化案のジャンルが異なる生徒のグループでの練り上げ活動、③ 活性化案を練り上げるための観点・視点の明確化、④ 円滑に、また、今後に生かすことができる練り上げる活動のためのマニュアルと記録。

単元を通して、生徒たちが地域の「ありがとうクリエイター」になる過程の一部を授業公開します。

*起業家を「ありがとうクリエイター」と指導者の伊藤准教授は表現しています。

ポイント2・3